

平城宮跡発見の殿堂雑形部材

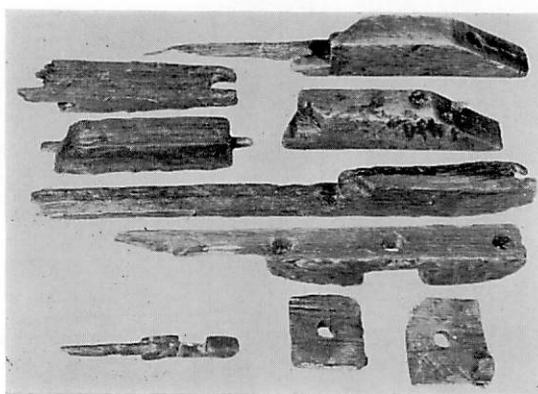
平城宮跡発掘調査部

推定第1次内裏の南面を画する築地回廊の東寄りにある樓風建物SB7802は、1973年に発掘した。今回、この掘立柱抜取穴から出土した木製品を調査整理する過程で、建築模型の斗枠の部材が含まれていることを確認した。

部材 部材は何れも桧材で、側通り肘木1丁、通肘木1丁、尾垂木を受ける肘木2丁、卷斗1個、方斗1個、入側束1丁、同断片1丁、軒天井組子断片1丁、土居桁らしいもの1丁でその他にも同じ模型に属するらしい部材の木口部分等があった。

側通りの肘木は現存全長23.3cm、丈3cm、幅2.5cm、肘木長さ14.8cm、両端の太柄穴心々は12.6cm、相欠上木の仕口を持ち、一方の木口に長いつなぎが作り出されている。他方は折損したらしい。このつなぎの長さからみて、柱間寸法が23.3cmを越える側通りの肘木であることがわかる。通肘木は先端を二手先を受ける肘木に作り出し、相欠下木で、上端に隅行の肘木の仕口を持つので、側通りの通肘木である。側柱通り相欠心から太柄心迄12cm、丈3.1cm、幅2.3cm、現存全長30.5cmである。先端に卷斗の丸太柄があるが、中間に太柄穴がない。先端の斗で隅の柱通り尾垂木受け肘木を支える。尾垂木を受ける力肘木は2丁あり、2丁とも丈3.3cm幅2.5cmで先端を斜めに作り、ここに尾垂木を止める丸太柄を立てる。先端の勾配は2丁でやや異なり、1丁は約5.2/10、他は約6/10となる。側通りからの出は2丁とも大差ない。この2丁は使われた層が異なるかもしれない。

斗には大斗がないが、卷斗と方斗が1個づつある。何れも完形ではない。卷斗は長さ4.1cm、幅4.0cm、斗尻は現在斜めになる。斗尻の一端は残り、斗縁の丈が1.4cmあり、かなり高い。全体の丈は不明であるが、長さの3/4位と見ると3.2cm程となる。方斗は上端に丸桁の組手を受けたらしい含みの底が残り、三手先の隅の方斗に当る。卷斗より大きく作られ、長さ4.9cm、幅4.5cmある。隅二重尾垂木の上にのると考えられ、斗縁はほとんど残っていない。

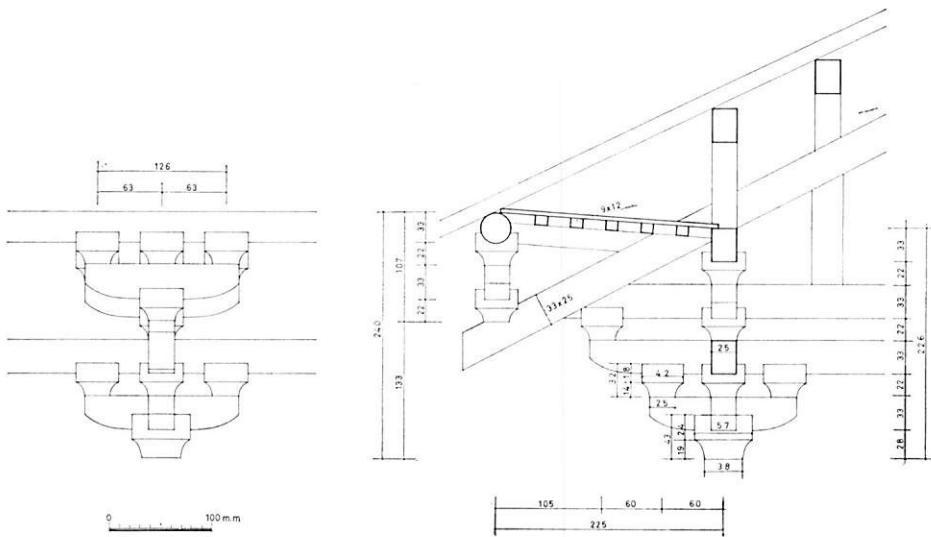


第1図 雜形部材

入側束は上端を斜に作り、上下に丸柄があり、内部で力肘木の上に立って直接尾垂木下端を受けていた。他にこれと同種材の断片が1丁ある。

軒天井組子は全長9.8cm、丈0.7cm、幅1.2cmあり、組子相欠きが2個所残存し、1支寸法は3.5cmある。幅はもとのままであるが、丈の方ははぎとられた痕があり、もう少し大きかったことがわかる。

土居桁は現存幅3.6cm、丈1.7cm、両端



第2図 三手先斗栱の復原

は折損するが、心々12cmの丸太柄穴がある。柱盤や台輪としては部材が細いので、内部の束受けと考えられる。

復原 これらの部材からもとの構成を第2図のように復原した。大斗の大きさが不明でありまた三手先の出も明らかでないが、軒天井の納まり、並びに薬師寺東塔・海竜王寺五重小塔の出を勘案して推定した。二手先にのびる肘木の中間に卷斗の太柄がなく、尾垂木を受ける力肘木には二手先の肘木と組合う仕口がない。従って軒支輪がなく、軒天井だけであったと考えられ、薬師寺東塔に近い古式の三手先斗栱であり、現存例として薬師寺に続く海竜王寺五重小塔よりも古式のものと考えられる。

海竜王寺五重小塔と同じく奈良時代の製作になる元興寺極楽坊五重小塔は、肘木長さ14.2cm、卷斗太柄心々11.8cm、丈3cm、幅2.4cmで発見部材とほぼ一致する。海竜王寺五重小塔の初重肘木は長さ13.2cm、丈2.5cm、幅2.3cmでやや小さいが、卷斗幅は4.2cmあってほぼ等しい。

この発見部材がどのような建造物の模型であったか明らかでないが、実物の1/10を意識して作られている。三手先斗栱は斗栱のうちでも、古代にあっては最も複雑な構成であり、寺院であれば金堂・塔・二重門等の重要な堂塔にのみ用いられる。

現存する奈良時代の小建築が、前記の海竜王寺五重小塔・元興寺極楽坊五重小塔・正倉院の紫檀塔残欠等何れも塔に限定されていることを考えると、この部材も塔に用いた可能性も少なくない。

部材を発見した樓風建物S B7802は、神龜頃の建立と推定され、柱抜取穴の埋土からは天平勝宝5年(753)の年紀をもつ木簡が出土しており、この模型の廃棄された時期もほぼこの頃とみてよからう。部材の数は少ないが、平城宮跡からこのような部材が発見されたのは初めてのことであり、しかも古式の三手先斗栱であることはきわめて興味のあることといえよう。

(細見啓三・岡田英男)